

「木村耕巖翁碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文
福岡〇四	木村耕巖翁碑	杉溪言長	西村時彦
			前田円

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
石喜代	一九一三・大正二	北九州市若松区修多羅	東南院	

一. はじめに
 本碑は、南画家木村耕巖の顕彰碑である。

○写真1 正面



木邨耕巖翁碑

◎篆額

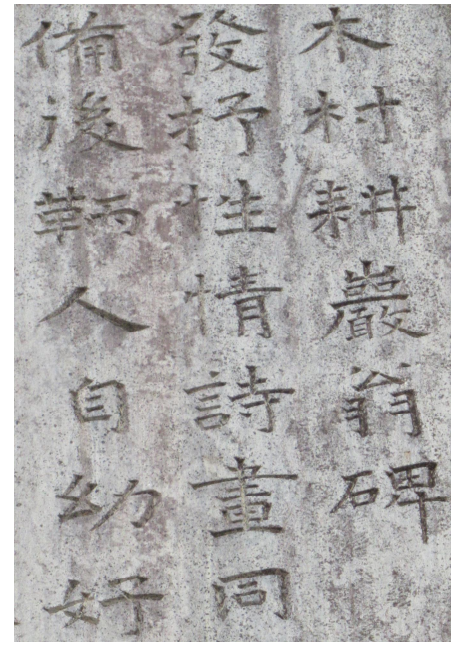
(石碑正面)

■翻刻

二. 翻刻並びに訳注



○写真2 篆額



○写真3 「碑記」部分

木村耕巖翁碑

貴族院議員從三位勳四等男爵杉溪言長篆額

發抒性情詩畫同歸窮而益工亦有相似者如木村耕巖翁豈其人歟翁諱悌字士本木村氏耕巖其號
脩後韞人自幼好畫年二十三至京師學花鳥於前田暢堂山水於中西耕石又問詩於梁川星巖與賴
鴨厓等交嘗寓大覺寺課餘參禪如此者十年技大進耕石養為嗣後有故復本姓先是將東遊途聞櫻
田之變而還明治維新風尚一變書畫大衰名人星散謀食四方翁亦歷遊諸國明治八年至東京居八
九年坊刻畫人錄以翁與瀧和亭對峙稱雄一方然翁性豪放與俗不合又出都門過遠州灘遇風濤船
殆覆世傳其死而翁纔免奔之風塵遂至筑紫倚居若松鬻技以活時年已踰耳順矣既而時運又一變
崇尚美術一技一藝之士競巧爭長莫不表襮于世翁年老筆益健為藝林耆宿而隱居西陬不求自售
世無復知其存沒者終以明治四十四年七月二十日病歿于若松享壽八十二葬于東南院塋域翁之
於畫人物邱壑以至花卉翎毛鱗介皆究古法取工傳彩往往自出新意筆有逸氣然以不失細謹不流
狂逸為戒常謂弟子曰學畫須神會心得雖有師法然不可以口授言傳也翁有時作詩文而非其所長

第其悟畫理得之禪味生平淡于名利子然跌坐如老頭陀有索畫者不興到意適則未嘗率易落筆是以日益貧時時乏食性嗜酒晚年以茶代酒茶亦不能得則煎豆當茶其窮苦人所不堪翁居之晏如也世益竒之而其畫貴于死後人爭購之斷縑零素亦不易獲云翁歿後三年門人肯謀立碑於東南院中以圖不朽請文於余余深嘉其厚于師弟之誼且謂方今文運昌明藝術隆興豈可令長于一藝如翁者泯泯弗傳乎乃按狀製文以諗後之遊於藝者

大正二年歲癸丑二月

大隅 西村時彥撰 播磨 前田圓書

*異体字等

○碑	○亦	○嘗	○國	○隱	○須	○益	○隆
○員	○號	○參	○亭	○亭	○所	○奇	○興
○從	○備	○此	○豪	○翎	○第	○織	○歲
○勳	○年	○養	○走	○介	○坐	○冒	○圓
○等	○京	○遊	○僑	○取	○興	○誼	
○男	○於	○衰	○美	○流	○能	○能	

■ 訳注

◎ 題額

木村耕巖翁碑

◎ 碑記

● 本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

木村耕巖翁碑

貴族院議員從三位勳四等男爵杉溪言長篆額

發抒性情、詩畫同歸。

窮而益工、亦有相似者。

如木村耕巖翁、豈其人歟。

翁諱悌、字士本、木村氏、耕巖其號。

備後鞆人。

自幼好畫。

年二十三至京師、學花鳥於前田暢堂、山水於中西耕石。

又問詩於梁川星巖、與賴鳴厓等交。

嘗寓大覺寺、課餘參禪。

如此者十年、技大進。

耕石養爲嗣、後有故復本姓。

先是、將東遊、途聞櫻田之變而還。

明治維新、風尚一變。書畫大衰、名人星散、謀食四方。

翁亦歷遊諸國、明治八年至東京。

居八九年、坊刻畫人錄、以翁與瀧和亭對峙、稱雄一方。

然翁、性豪放、與俗不合、又出都門。

過遠州灘、遇風濤、船殆覆。世傳其死。

而翁纔免、奔走風塵、遂至筑紫、僑居若松、鬻技以活。

時年已踰耳順矣。

既而時運又一變、崇尚美術。

一技一藝之士、競巧爭長、莫不表襮于世。

翁年老、筆益健、爲藝林耆宿。

而隱居西陬、不求自售世、無復知其存沒者。

終以明治四十四年七月二十日、病歿于若松。享壽八十二。葬于東南院塋域。翁之於畫、人物邱壑、以至花卉翎毛鱗介、皆究古法。最工傳彩。

往往自出新意、筆有逸氣。

然以不失細謹、不流狂逸爲戒。

常謂弟子曰、學畫須神會心得、雖有師法、然不可以口授言傳也。

翁有時作詩文、而非其所長。

第其悟畫理、得之禪味。

生平淡于名利、子然跌坐、如老頭陀。

有索畫者、不興到意適、則未嘗率易落筆。

是以日益貧、時時乏食。

性嗜酒。晚年以茶代酒、茶亦不能得、則煎豆當茶。

其窮苦人所不堪、翁居之晏如也。

世益奇之、而其畫貴于死後。人爭購之、斷縑零素亦不易獲云。

翁歿後三年、門人胥謀、立碑於東南院中、以圖不朽。

請文於余。余深嘉其厚于師弟之誼。

且謂、方今文運昌明、藝術隆興。豈可令長于一藝如翁者、泯泯弗傳乎。

乃按狀製文、以諗後之遊於藝者。

大正二年歲癸丑二月

大隅 西村時彥撰

播磨 前田圓書

● 訓詁

木村耕巖翁碑。

貴族院議員從三位勳四等男爵杉溪言長篆額。

性情を發抒するは、詩畫 歸を同じくす。

窮むれば益々たぐ工みなるも、亦た相ひ似たる者有り。

木村耕巖翁の如き、豈に其の人ならんか。

翁、諱は悌、字は士本、木村氏、耕巖は其の號なり。

備後鞆ともの人なり。

幼きより畫を好む。

年二十三にして京師に至り、花鳥を前田暢堂に、山水を中西耕石に學ぶ。

又た詩を梁川星巖に問ひ、頼鴨厓等と交はる。

嘗て大覺寺に寓し、課餘に禪に參ず。

此かのごとくすること十年、技大いに進む。

耕石養して嗣となすも、後に故有りて本姓に復す。

是より先、將に東遊せんとし、途に櫻田の變を聞きて還る。

明治維新、風尚一變す。書畫大いに衰へ、名人星散し、食を四方に謀る。

翁も亦た諸國を歴遊し、明治八年、東京に至る。

居ること八九年、坊刻畫人録、翁を以て瀧和亭と對峙し、雄一方と稱す。

然れども翁、性豪放にして、俗と合はず、又た都門を出づ。遠州灘を過ぎ、風濤に遇ひ、船殆んど覆る。世、其の死を傳ふ。而して翁纔かに免れ、風塵に奔走し、遂に筑紫に至る。若松に僑居し、技を鬻ぎて以て活く。

時に年已に耳順を踰えたり。

既にして時運又た一變し、美術を崇尚す。

一技一藝の士、巧を競ひ長を争ひ、世に表襮せざるはなし。

翁年老いたるも、筆は益々健にして、藝林の耆宿たり。

而して居を西陲に隠して、自ら世に售るを求めず、復た其の存没を知る者無し。

終に明治四十四年七月二十日を以て、若松に病歿す。享壽八十二。東南院の塋域に葬らる。

翁の畫におけるや、人物邱壑より以て花卉翎毛鱗介に至るまで、皆な古法を究む。最も傳彩に工みなり。

往往、自ら新意を出だし、筆に逸氣有り。

然れども細謹を失せず、狂逸に流れざるを以て戒めとなす。

常に弟子に謂ひて曰く、

畫を學ぶには須らく神會心得すべし。

師法有りと雖も、然れども以て口授言傳すべからざるなり、と。

翁に時に詩文を作る有るも、其の長ずるところに非ず。

第だ其の畫理を悟るは、之を禪味に得たり。

生平、名利に淡にして、子然として跣坐するは、老頭陀の如し。

畫を索むる者有るも、興の到り意の適ふにあらざれば、則ち未だ嘗て率易に落筆せず。

是を以て日に益々貧にして、時時食に乏し。

性、酒を嗜む。晩年は茶を以て酒に代へ、茶も亦た得る能はざれば、則ち豆を煎りて茶に當つ。

其の窮苦は人の堪へざるところなるも、翁は之に居りて晏如たるなり。

世益々之を奇とす。而して其の畫は死後に貴し。人争ひて之を購ひ、斷縑零素も亦た獲

易からずと云ふ。

翁の歿後三年、門人胥に謀り、碑を東南院中に建て、以て不朽を圖る。

文を余に請ふ。余深く其の師弟の誼に厚きを嘉す。

且つ謂へらく、方今は文運昌明にして、藝術隆興す。豈に一藝に長ぜる翁の如き者をして、泯泯として傳へざらしむべけんや、と

乃ち状を按じ文を製し、以て後の藝に遊ぶ者に諗ぐ。

大正二年歲癸丑二月。

大隅の西村時彦撰す。

播磨の前田圓書す。

●人物

○木村耕巖

○杉溪言長 慶応元（一八六五）年から昭和十九（一九四四）年。京都右近衛権中将山

科言繩の三男。興福寺住職、春日社神司などをつとめ、明治八（一八七五）年に華族に列せられ、同十七（一八八四）年に男爵を叙爵。同二十三（一八九〇）年に貴族院議員に選出され、大正十四（一九二五）年まで五期在任した。南画家としても知られ、『美人百態』などの画集も出した。

○前田暢堂 文化十四（一八一七）年から明治十一（一八七八）年。諱は碩、字は子果等、号が暢堂、また半田。出身は讃岐（徳島県）半田。医者前田養拙の子として京都で生まれ、貫名菘翁らに日本画を学び、画家として主に京都で活躍した。

○中西耕石 文化四（一八〇七）年から明治十七（一八八四）年。諱は寿、字は亀年、号が耕石。筑前（福岡県）芦屋出身。若くして上京し、大坂で漢学の篠崎小竹の門下となり、のち京都で南画を学び名声を得る。明治十五（一八八二）年には京都府画学校の教授に就寝した。

○梁川星巖 寛政元（一七八九）年から安政五（一八五八）年。諱は卯、のち孟緯、字は伯兔、のち公図、号が星巖。岐阜県大垣市曾根町出身。折衷学派の山本北山に学び、江戸で漢詩人として活躍した。橋本左内らと交流があったため、安政の大獄では捕縛大正となったが、その直前にコレラで急死した。

○頼鴨厓 文政八（一八二五）年から安政六（一八五九）年。諱は醇、通称三樹三郎、号が鴨厓。頼山陽の三男として京都で生まれる。大坂や江戸で儒学を学んだが、次第に尊皇運動に感化されてゆく。国内を旅して蝦夷では松浦武四郎とも交友を結んだ。京都に戻ると、一層勤王運動にのめり込み、井伊大老による安政の大獄で捕らえられ、斬首された。

○瀧和亭 かてい 文政十三（一八三〇）年から明治三十四（一九〇一）年。諱は謙、字は子直、号が和亭。本姓は田中。江戸で生まれ、南画を学ぶ。幕府に仕えたが、維新後は画家として活躍し、ウィーン万博などに出品し、内国勸業博覧会では毎回受賞した。明治二十六（一八九三）年には帝室技芸員となった。

○西村時彦 ときひこ 慶応元（一八六五）年から大正十三（一九二四）年。諱が時彦、字は子駿、号が天囚、また碩園。大隅（鹿児島県）種子島出身。明治十三（一八八〇）年に東京帝国大学古典講習科に入学し、重野安繹らに学ぶが、まもなく退学。同二十三（一八九〇）年に大阪朝日新聞の記者となる。同二十五（一八九二）年、福島安正陸軍少佐が単騎でベルリンからシベリアを横断し、翌二十六（一八九三）年にウラジオストクに到着した。いわゆる「シベリア単騎横断」である。時彦はウラジオストクで福島少佐を迎え、帰国後彼から旅行の記録を聞き取り、大阪朝日新聞に「単騎遠征録」として連載し、孝標を博した。同三十七（一九〇四）年に「天声人語」を始める。同三十九（一九〇六）年と同四十（一九〇七）年の九州旅行記がある。大正五（一九一六）年に京都帝国大学講師。同九（一九二〇）年に文学博士。宮内省御用掛などもつとめた。本碑文の撰文は、耕巖の門人である塚本子孝が、時彦の友人であった橋本子行を仲介人として時彦に依頼し、実現したものである。

○前田圓 嘉永六（一八五三）年から大正七（一九一八）年。諱が円、字は土方、号は黙鳳。播磨（兵庫県）竜野出身。明治九（一八七六）年に上京し、書肆博文館に入社。同十五（一八八二）年には、自ら書肆鳳文館を開き、「資治通鑑」などの翻刻刊行を行う。しかし、漢学の衰退とともに経営が悪化し、同二十一（一八八八）年には廃業。のち書

学会を発足させ、会報「書鑑」を発行。同四十一（一九〇八）年には杉溪言長らと健筆会を起こし、書の研究を行うと共に展覽会も開催するなど、書道の普及発展につとめた。大正三年には、康有為著の書論「広芸舟双楫」を中村不折らと翻訳し、「六朝書道論」として刊行した。付録の「六名家書談」では当時の能書家六名をあげているが、その中に日下部鳴鶴、内藤湖南、犬養毅らとともに、前田円の名が挙げられている。

●注

- 發抒 表す、表現して伝える。
- 性情 思い、考え。
- 詩 漢詩。
- 同歸 同じ所へ行き着く。
- 窮 究極まで追求する。
- 工 巧妙。
- 豈其人歟 豈は推量。まさにその人であろう。「其」は「窮而益工」を指す、と解した。
- 備後 今の広島県東部。
- 靱 今の福山市靱の浦。朝鮮通信使の訪問地として知られる。
- 京師 京都。
- 問 問訊。教えを請う。
- 大覺寺 京都嵯峨野にある真言宗大覚寺派の総本山。嵯峨天皇の離宮として造営され、貞観十八（八七六）年に入道親王を開山として開創。以後、明治時代初頭まで代々天皇もしくは皇統が住職を務める門跡寺院であった。
- 課餘 課業のあいま。課業とは絵画の勉強だろう。
- 参禪 禪の道に入り、禅学を学ぶこと。ここでは本格的に禅を学ぶのではなく、座禅に参加するくらいではないか。
- 養爲嗣 養子にする。
- 櫻田之變 桜田門外の変。安政七（一八六〇）年三月三日、江戸城桜田門の外で、水戸藩の脱藩者たちが、大老井伊直弼を襲って暗殺した事件。
- 風尚 社会の気風・習俗。
- 一變 全く変わる、際だって変わる。
- 書畫 書道と日本画。
- 星散 ばらばらに散らばる、四散。
- 謀食 生活を考えること。「論語」衛靈公篇に「君子謀道、不謀食（君子は道を得ようとはつとめるが、食を得ようとはつとめない）」とある。
- 四方 東西南北。ここでは中央（東京や京都）ではない地方。
- 明治八年 西暦一八七五年。
- 坊刻 民間の書肆からの出版物。
- 畫人録 画家列伝。具体的な書物は不明。
- 對峙 向かい合って立てる。
- 雄一方 一方の雄。並ぶ二つの内の、一方の傑出した存在。
- 豪放 奔放で小事にこだわらないさま。

- 都門 都の城門。また都。
- 遠州灘 太平洋の海域で、遠江（静岡県西部）の御前崎沖から三河（愛知県東部）の伊良湖崎沖まで。太平洋に面した長い航路は、海の難所とされ、しばしば海難事故が起こった。現在でも毎年何件か報告されている。
- 風濤 風と大波。
- 纒 やつと、かろうじて。
- 奔走風塵 風塵は、風と塵で、家の外。旅先、またそこでの苦勞。そこを奔走（はしる）するとは、行旅の苦勞を重ねること。
- 筑紫 九州の古称。また筑前筑後（福岡県）。
- 僑居 仮住まいとする。
- 若松 現北九州市若松区。当時は若松町。大正三年に市制に移行した。
- 耳順 六十歳。「論語」為政篇に「子曰、吾……六十而耳順」とある。
- 既而 まもなく。
- 時運 時流。
- 崇尚 重んずる。
- 爭長 席次の序列を争う。
- 表褻 自慢する。
- 藝林 芸術家仲間。
- 耆宿 学徳が高く人望がある年寄り。
- 陬 片隅、辺鄙なところ。
- 售 売り出す。
- 存没 生死。
- 明治四十四年 西暦一九一一年。
- 亨壽 亨は享に同じ。受ける。壽は寿命。天から授けられた寿命。
- 塋域 墓地。
- 邱壑 丘と谷。山水。
- 花卉 花の咲く草。
- 翎毛 翎は鳥の羽。翎毛で鳥獣。
- 鱗介 魚類と貝類。
- 古法 古くからの技法。
- 傳彩 彩色、着色。「宣和画譜」に「曹仲元……尤工傳彩、有一種風格」とある。
- 往往 常々。また時折。
- 新意 新しい意義、見解。
- 逸氣 優れた気質・気性。また世俗から脱した気質・気性。
- 細謹 些細な礼儀作法。ここでは小手先の技術や、些末な、細かいところだろう。
- 狂逸 ほしいままに走り回る。書法が奔放飄逸なことを例える。
- 神會 神は精神、心。心の底から領會（十分に理解する）すること。
- 心得 心で体得する。
- 師法 先生から伝授された、我流ではない学問や技術。
- 口授 弟子に直接語って教える

- 言傳 言葉で伝える。
- 畫理 熟語はないが、絵画のことわり、だろう。
- 禪味 禪の趣。
- 生平 普段。平生。
- 淡 こだわらない、執着しない。
- 名利 名譽と利益。
- 子然 孤立しているさま。
- 跣坐 結跏趺坐。座禪の座り方。
- 頭陀 托鉢僧。
- 興趣 おもむき、こころが向かうこと。
- 意 気持ち。
- 適 当を得る。
- 率易 簡単に、いかげんに。
- 落筆 筆を取って描き始める。
- 時時 いつも、たびたび。またときおり、たまに。
- 晏如 落ち着いているさま。
- 奇 奇人、めったにないほど優れた人。
- 斷縑 縑は絹布。画材。絵画の切れ端。
- 零素 素は白絹だが、ここでは画材。零細な絵画の端切れ。
- 誼 交情。
- 方今 いま、現在。
- 文運 学問芸術の進歩・衰退の成り行き。
- 昌明 隆盛、発展。
- 泯泯 ほろびるさま。
- 按状 熟語はないが、按は調べる、状は状況で、耕巖に関する情報をあれこれ調べることか。
- 製文 文章を書く。
- 諗 告げる、伝える。
- 遊於藝者 遊芸で、学問技芸を修めるもの。
- 大正二年 西曆一九一三年。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【碑記題名と篆額揮毫者】

木村耕巖翁の碑。

貴族院議員従三位勲四等男爵杉溪言長による篆額。

【漢詩と類似する絵画のあり方】

思いを表現して伝えるという点においては、漢詩と絵画はその帰するところを同じくする。

窮極まで追究することで、益々巧妙になっていくという点でも、漢詩と絵画は似ているところがある。

木村耕巖翁こそは、まさにそのような人であるといえよう。

【翁の出自と絵画の学び】

翁、諱は悌、字は士本。姓は木村。耕巖はその号である。備後の鞆の浦の出身。

翁は幼いころから絵画を好んでいた。

二十三歳のときに京都へ出て、花鳥画を前田暢堂に、山水画を中西耕石に学んだ。

また作詩を梁川星巖の門で学び、同窓の頼三樹三郎らと交遊した。

京都の大覚寺に仮寓していたことがあり、絵画を学ぶ合間には、座禅の会に参加したこともあった。

このような学びを十年ほど続け、絵画の技は大いに進んだ。

中西耕石は、翁を評価して自分の養子とし、跡を継がせようとした。しかし、のちに故あって養子縁組を解消し、元の木村姓に戻った。

【諸国歴遊と上京、高評価】

養子縁組解消よりも前のことだが、江戸へ出ようとしたことがあった。しかし、途上で桜田門外の変が起こったことを聞き、政情不安を感じて江戸へ出ることをやめ、京都に引き返した。

やがて明治維新となり、世の中の気風が一変して、西欧文明礼賛の時代となった。その中で、伝統的な書道や日本画は省みられなくなり、評価は大いに下落衰退した。それまで高い地位や評判をほしのままにしてきた書画の名人達も、名声や後援者を失い、食を求めて地方にばらばらになった。

翁も同様に諸国を歴遊したが、明治八年に至り、東京にたどり着いた。東京には八九年ほど滞在したが、翁の絵画の評価は高まり、民間書肆の刊行した画家列伝の類いでは、翁は瀧和亭と双璧とみなされ、一方の雄だとする高い評価を受けていた。

【再びの諸国歴遊と若松僑居】

しかし、翁は豪放磊落、小事にはこだわらない性格だったため、そうした世俗からの評判などを受け入れることができず、ついには再び東京を出て諸国遊歴へ旅立った。

そして遠州灘を航行中、強い雨風に遭遇し、乗った船が転覆しそうになった。そこで世間では、翁は死んでしまったのだと伝えられた。

しかし、実は翁はかろうじて死を免れていた。その後、行旅の苦労を重ねた末、ついに九州は筑紫の地にたどり着いた。そして若松の地に仮住まいを構え、絵画の技を以て生活の糧とした。そのとき既に六十歳を超えていた。

【伝統文化再評価と翁】

まもなく、時運がふたたび一変し、今度は伝統的な美術が重んじられるようになった。技芸を持つ芸術家達は、その巧みさを競い、評価の序列を争って、自ら誇って世に名声を上げようとするものばかりであった。

翁は年老いていたが、まだまだ健筆で、芸術界の重鎮たるにふさわしいものがあった。

しかし九州の若松という西のはずれに身を潜めるようにしており、自ら世間に売り込もうとはしなかったため、世に彼の生死を知るものもなく、忘れ去られていた。

【翁の最期】

かくしてついに、明治四十四年七月二十日、若松の地で病み、亡くなった。享年八十

二歳であった。若松高塔山の東南院の墓地に葬られた。

【翁の画風】

翁の画風は、人物画山水画から、花鳥画に至るまで、すべてにおいて伝統的な文人画の道を究めたものであった。なかでも彩色において最も優れたものがあった。

その一方、ときおり新しい見方や描き方を発出し、筆遣いは決まりにとらわれない自由さを帯びていた。

しかしその中でも、細かいところにとらわれすぎず、奔放飄逸に流れてしまわないことを戒めとしていた。

常々弟子達に言うには、「絵画を学ぶには、必ず自分の心、精神で領会、会得しなければならぬ（手先指先の技術をまねするものではないこと）。師匠から伝える教えはあるのだが、口頭で伝えられるものではない（実作を通して学ぶということ）」と。

【翁の孤高の生き方と死後の高評価】

翁は時に漢詩文を作ることがあったが、それは翁の得意とするところではなかった。

しかし、絵画の理を悟り会得したことは、禪の趣に通じるところがあった。

平生、名誉や利益とは無縁で、ひとり孤高を守り座禅を組む姿は、あたかも老いた托鉢僧のようであった。

絵画を所望するものがない、自らの興が乗らず、気持ちがかたうことがなければ、決して軽々しく筆を取ることにはなかった（求めに応じて気軽に絵を描くことはせず、自らの内発的な動機に基づくときのみ筆を取った。）

そういうわけで、翁は日に日に貧乏になり、食事に事欠くことすら度々であった。

翁は本性、酒を嗜んでいたが、貧しくなった晩年は、お茶を酒代わりとした。そのお茶も手に入らなくなると、豆を煎ってお茶に代えた。

こうした困窮は、常人では堪えられないものであったが、翁はそうした暮らしを平然と受け入れ、ちっとも気に病むことは無かった。

世間はますます翁を奇人とみなした。

そうして、翁の没後、その絵画は高く評価され、高い値段をつけられるようになった。人々は争うようにして翁の絵画を買い求め、断片切れ端ですら、なかなか手にはいらぬというありさまであったという。

【建碑の企て】

翁の没後三年たったとき、門人達が相謀り、翁の顕彰碑を菩提寺の東南院境内に建て、その名を不朽なものにしようと図った。そして私にその文章を求めたのである。

【撰者の評価】

私は、翁とその弟子達との交わりがとてもねんごろであることをよいことと思った（ので碑文を書くことを承諾した）。

加えてこうも考えた、「今現在、学問芸術は隆盛発展の時期にさしかかっており、芸術の隆興も盛んなときである。こうした時代にあつて、翁のようにひとつの芸術に傑出していた者を、なかったものとして伝承しないということではよいのだろうか。いやかならず記録して後世に伝えるべきである」と。

かくして翁に関わる事柄を調べ集め、文章としてとどめ、後世の学問技芸を修めるものへ、告げて伝えるものである。

【記事】

大正二年、癸丑の歳、二月。
大隅出身の西村時彦が撰文した。
播磨出身の前田円が文字を書いた。

三．資料

・「木邨耕巖翁碑」（西村時彦文集「碩園先生文集」巻二所収）

四．主な参考資料

① 翻刻と訓読

・荒井周夫『福岡県碑誌 筑前之部』（大道学館出版部、一九二七）雑纂（本文と訓読）
・『若松市史』（一九三七）第十三章人物木村耕巖（本文）
・園生裕「木村耕巖について（下）」福山市鞆の浦歴史民俗資料館『く潮待ちの館く資料館だより』第五六号（二〇一六・三・一五）（本文と訓読）
・園尾裕「木村耕巖について―西村天囚撰碑文を中心として―」『南画家 木村耕巖…知られざる鞆の先覚者』福山市鞆の浦歴史民俗資料館、二〇一六（訓読）

② 論文など

・園生裕「木村耕巖について（上）」福山市鞆の浦歴史民俗資料館『く潮待ちの館く資料館だより』第五五号（二〇一五・九・三〇）、同「木村耕巖について（下）」同第五六号（二〇一六・三・一五）
・園尾裕「木村耕巖について―西村天囚撰碑文を中心として―」『南画家 木村耕巖…知られざる鞆の先覚者』福山市鞆の浦歴史民俗資料館、二〇一六
・馬渡博親『石碑は語る…ですかばあ北九州』櫻の森通信社、二〇一七

以上

二〇二四年十一月 薄井俊二訳す